

櫻名木

眉作らせ、鐵黒なり、供奉の人々、我もくと美麗を盡し、わかやかなる出立なれば見物群集せり、廿七日紀州六田の橋を打渡り、市の坂に至て下らせ給へば新宅有、大和中納言秀俊卿より立させ給へる御茶屋にて侍るよし申ければ、則立寄せ給ふ、饗膳など上られければ、御心よげにす、みまいらせられ、それより千本の櫻花園櫻田ぬたの山、かくれがの松など御覽有て、秀吉公かくぞ詠じ給ふ。○下略

〔書言字考節用集生植〕ナシデシ
〔南殿櫻在紫宸殿抄河海拾芥詳ニ

〔江談抄公事〕一紫宸殿南庭橘櫻兩樹事

内裏紫宸殿南庭櫻橘樹者、舊跡也、件橘樹地者、昔遷都以前、橘本大夫宅也、枝條不改、及天德之末云云、又秦川勝舊宅者、但是或人說也。

〔古今著聞集草木〕十九南殿の櫻は村上の御時、式部卿重明親王の家の櫻匂ひ異なりとて、うつしうへられけれどぞ、其後たびくの炎上にやけにければ、又あらぬ木をぞうゑかへられける、代々の御門此はなを賞せさせ給ひて、花の宴を行なはる、承久に右馬權頭頼茂朝臣うたれし時、又やけにけり、やがて造内裏ありしに、この櫻のたね大監物源光行が家にうつしうへたるよし聞へて、めしてうへられけれどぞ、いづれの時のたねにてか有けん、おぼつかなし、其櫻もいく程なくてやけぬれば、今はあとだにもなし、くちおしきこと也。

〔古今要覽稿草木〕一紫宸殿左近櫻

左近の櫻といふは、紫宸殿の前東方にあり、平安城草創の時よりの樹といへば、桓武天皇の御時より有しなるべし、天徳の火にやけたるは草創よりの樹にや、其後康保元年十一月植られしは、そのとしに枯たり、その二年正月植られたるは、三月花宴せさせ給ひしといひ、その後度々焼て、堀川院の御時に植られし樹、順徳院の御時までは残りしとなり、同左近衛大將櫻の東に列